視覚障害者と一緒に見る鑑賞プログラムでの一コマ（東京都現代美術館　2014年、撮影：中島祐輔）

あらゆる人が芸術文化を享受できる社会基盤を構築

- すべての子供や青少年、障害者が芸術文化を享受できる仕組みを推進し、世界をリードする成熟都市として、都市の豊かさを創出する。
- 文化施設において子供や高齢者、障害者、外国人など、様々な人々がストレスなく芸術文化に触れることができる環境を整える。
- すべての都民が創造活動に参加でき、都民の主体的な活動が豊かな社会の未来につながっていく。

平成21年度東京芸術劇場 発表公演
パフォーマンスキッズ・トーキョー「からだのキモチ」©鹿島聖子

東京が持つ芸術文化の力

- **東京・日本では幼少期からピアノ、ヴァイオリン、バレエ、書道などを習う子供が多く、都民たちが創作した作品の発表活動も活発に行われているなど、巨大な文化交流の基盤が存在する。**
- **東京では、各地の公立美術館や公民館などの公共施設が、都民の文化活動に利用されている。また、文化に関心を寄せる企業も多く、美術館や博物館、劇場や音楽ホールなどを設置し、芸術文化の振興に貢献している。**
- **様々な団体が芸術文化振興に携わっており、都民が伝統から現代までの多彩な芸術文化に身近で気軽に触れられる等、文化的刺激に満ちた豊かな日常生活を楽しむことができる機会が数多く存在している。**

現在の取組例

- 都は、多くの都民が様々な分野の作品に気軽に触れられるよう入場料金を低廉に抑えた公演事業や、上野公園に所在する文教施設が連携し、子供たちが美術館や博物館等に親しみ、大人と共に学び合う機会を創出する事業を展開している。
- 都内の音楽ホールでは、あらゆる人々にとって音楽が身近なものになるため、一流の演奏家による楽器の演奏体験会が行われている。また劇場では、劇団等と連携して、地域の学校への出張公演や演劇体験などが実施されている。
- 地域の市民ギャラリー等においても、障害者を対象とした、次世代の芸術家を発掘する全国規模の公募展が開催されている。

手話通訳士をナビゲーターとした鑑賞プログラムでの一コマ
（東京都現代美術館 2014年）

施策の方向性

すべての子供や青少年が芸術文化に主体的に関わることができる「教育プログラム（仮称）」の確立

●学校や学童クラブ、公民館等の様々な場所において、様々な分野の芸術家との交流や芸術文化体験ができる「場」を創出する。また、学校における教育活動等においても、子供たちが日本の伝統文化はもとより、海外の芸術文化に触れられる機会を拡充する。

●都立文化施設において、芸術系大学や芸術文化団体等と連携し、子供たちが本物の芸術文化を体験するワークショップ※1を積極的に展開する。それらの取組を発信し、国公立や民間の文化施設へ波及させる。

都内文化施設の魅力向上及び「首都圏芸術文化施設ネットワーク（仮称）」の推進

●上野において、芸術文化施設や交通機関と連携したICカードなどを使った共通入場券の仕組みを導入する。これを踏まえ、首都圏における広域入場券として拡大する。

●開館時間延長などを通じた夜間集客数の拡大に向け、共通イベントの実施を提唱

●都立施設における多言語化や「Wi-Fi」整備、収蔵品や展示品のデジタルアーカイブ※2化など、ソフト面での充実を図る。

●舞台・施設機能の強化や施設のバリアフリー化等を図るための東京文化会館の全面改築、江戸東京たてもの園の展示建物やその他各館の収蔵機能の充実などハード面での検討も進め、世界に開かれた魅力溢れる文化施設として国内外に発信

障害者アート※3への支援や障害者の鑑賞・参加を促す活動の推進等、文化の面で世界で最も進んだバリアフリーな都市として認知される取組の展開

●東京都現代美術館に「アールブリュット」※4の発表の場を設置するなど、都立文化施設が民間文化施設等と共に障害者アートの東京としての存在感を発揮していく。

●作品の創作・展示環境を備え、自治体、大学、福祉施設、NPO等の地域の関係者とアールブリュットの拠点を多摩地域に形成する。

●イギリスの「アンリミテッド」※5などと連携し、障害者の芸術創造活動や鑑賞・参加を促すNPO等の活動を支援する。

東京で開催される展覧会や公演情報の集約化と多言語化の推進

●都内の芸術文化情報を一元的に収集・閲覧できるホームページを民間企業等と共同で構築する。

※1 芸術家等の専門家の指導を受けながら、参加者が共同で創作、鑑賞、議論等を行う活動
※2 博物館、美術館、公文書館などの所蔵資料を電子化して保存・公開するシステム
※3 障害者による芸術文化の創作・発表活動のこと。詳細はP34-35を参照
※4 フランス語で「生（き）の芸術」の意。フランスの画家ジャン・デュビュッフェにより提唱された「美術教育を受けていない人などが、既成の表現法にとらわれず自由に制作した作品」をいう。狭義には障害者の作品や芸術文化を指す。
※5 英国で実施されている障害者による芸術文化活動の支援事業。詳細はP34を参照

イギリスにおける「アンリミテッド」と障害者アートプログラム「TURN」

アンリミテッド（UNLIMITED）とは

2012年ロンドンオリンピック・パラリンピックの「文化オリンピアード」の一環として2010年に設立した、障害のあるアーティストの活動を支援する取組。新作の創作及び創作のための研究開発、発表の支援、その他創造環境整備、若手育成などを行う。パラリンピック開催時は、イギリス最大の国立文化複合施設サウスバンクセンターで“アンリミテッド2012フェスティバル”を実施した。シニアプロデューサーは、Jo Verrent（聴覚障害のあるアーティスト／プロデューサー／支援団体主宰）。

理念（支援基準）

- 障害者が主導・主体となっている活動・作品であること
- プロフェッショナルな創造活動を行うアーティストや創造団体
- あらゆる芸術表現・分野
- 連携団体等との積極的な制作体制
- 高いクオリティの創造活動・作品
- 巡回公演や巡回展が可能であること

アンリミテッドフェスティバル2014パフォーマンス風景
（若手育成プログラムの一作品）（Rachel Cherry撮影）

アンリミテッドフェスティバル2014の展示風景
（Lea Cummings作品，Rachel Cherry 撮影）

障害のある作家が夕食会の主催者と招待客に扮し、
観客を巻き込みながらパフォーマンスをする作品
作品名「The Dinner Party Revisited」（Katherine Araniello）

認知症の母親の行動を温かい目線でつづった演劇作品
作品名「Let Me Stay」（Vital Xposure）

TURN Center イメージ
障害の有無や年齢に関わらず、いろいろな人が集い、
ゆるやかに関わりながら過ごせる場。
写真：たけし文化センター
（NPO法人クリエイティブサポートレッツ）より

「TURN～ひとがはじめからもっている力の回帰～（仮）」とは

東京芸術文化評議会の評議員によって提言された障害者アートプログラム。絵画や彫刻などの造形活動、演劇や音楽などの創作活動、多様性に関する対話等を含め、日々の営みの中で生み出されるあらゆる表現を通して、障害・健常の別なく人々が関わり合い、「生来の力」を発揮し合うプログラムを展開。

“ひとがはじめからもっている力の発信”

障害を力と捉える。欠けているのではなく、能力として。
この力は、誰しもが生来もっている生命の力。
「TURN」（ひとがはじめからもっている力への回帰（仮））は、
全てのものはつながり関係しあっているという
日本古来からの価値観をベースにした、「共生」へのメッセージです。
さらに、「TURN」を実践するものとして、2つのプログラム
「TURN Center」（仮）と「TURN Festival」（仮）を提案します。

TURN Center（仮）

生まれてから蓄えた情報・知識を越え、ひとがはじめからもっている力に気づき、その力を共有する通年の活動の場。単発の「プログラム」ではなく永続的な「システム」をつくる。個々の違いを尊重できる「アート」の原理をこれからの社会の基礎的思考として築く。

- 障害の有無やバックグラウンドに関わらず、幼児や老人などあらゆる人が受け入れられ、自らの居場所を見つけ、コミュニケーションしながら「ともに過ごせる場」にする。
- コミュニティスペース、ギャラリーをはじめとする複合的機能を蓄えた場に。
- 若手アーティストの就労・発表の場としても位置づける。
- 先端のデジタルツールとアートの融合により、バリアフリーを広げる試みを展開。

TURN Festival（仮）

「TURN Center」の成果を広く発表する場。オリンピック文化プログラムのリーディングプロジェクトとして開催。2015年度から継続的に開催予定。

- ビジュアル／パフォーマンス／思想などを軸に複合的な内容
- みんなで見る／みんなで参加するといった多様な関わり方を可能に
- 障害や差別について考える機会の創出
- 教育、治療、就労などについての意見交換会や、ディスカッションなど

Message from Yoshiyuki Ooshita

三菱UFJリサーチ＆コンサルティング株式会社
芸術・文化政策センター長
東京芸術文化評議会 評議員
太下義之（おおしたよしゆき） 氏

この「東京文化ビジョン」には、3つの意義・目的があるのではないかと私は考えている。

一つは、東京における文化芸術をより一層の魅力的なものに向上させていくという目的である。二つ目は、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックの文化プログラムにおいて、日本全国の先導的役割を果たすという役割である。そして三点目は、成熟した都市の将来像というものを、文化振興を通じて確立し、これを世界に向けて発信していくという意義である。

これら第二・第三の意義を勘案すると、「東京文化ビジョン」は、もはや狭義の文化政策のビジョンにとどまるものではない。東京から日本全体へ、そして世界へ向けて、ともに未来を創造していくためのビジョンであり、メッセージなのである。後世から現在という時代を振り返った時に、この「東京文化ビジョン」が一つの時代の転機であったと評価されるようなものであってほしいと私は願っている。

Message from Kazushi Oono

©HARUKI

フランス国立リヨン歌劇場首席指揮者
東京都交響楽団音楽監督
東京芸術文化評議会 評議員

大野和士（おおのかずし）氏

東京都民の皆様。2020年オリンピック・パラリンピックに伴い、その前後に、日本から世界に発信する‘文化プロジェクト’が行われます。

文化プロジェクトは、都民の皆様が日常の文化活動を世界の人々に届けられ、東京の文化の成熟度を披露する機会でもあります。毎日の新聞欄に、短歌、和歌などがこれだけ投稿される国、各学校に吹奏楽部やオーケストラがあり、毎年、何百校の中から金賞，銀賞などが授与される国、通信教育で、一般の多くの方々、障害をお持ちの方々、日本にお住まいの外国人の方々が大学入学試験資格を取得され、それぞれに羽ばたいていくことの出来る国、このような国は他に類を見ないのであります。

これらの例はほんの一部ですが、人として生を受けた限りにおいて、機会と努力によって夢開くことが可能な大都市東京の姿が、今、改めて、世界中にクローズアップされようとしています。

このたびの‘東京文化ビジョン’は皆様の手により実現されるものだと思います。お一人でも多くの方々に興味を持っていただき、東京の多種多様な文化、また忘れることの出来ない、東京都も特に力を注いでいる、被災地復興支援の姿などを世界中の方々に改めて認識してもらう機会になるよう願わずにいられません。